

News Letter

2022
Spring issue

令和4年5月31日発行

*Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences
Division of Sociology of Physical Education and Sport*



日本体育・スポーツ・健康学会
体育社会学専門領域

事務局：〒002-8502

札幌市北区あいの里五条三丁目 1-5

北海道教育大学 札幌校

石澤 伸弘 研究室内

E-mail:

ishizawa.nobuhiro@s.hokkyodai.ac.jp

< 目 次 >

研究会傍聴記	1
「年報 体育社会学 第3号(2022)」の 発刊について	3
「年報 体育社会学 第4号(2023)」の 原稿募集について	3
学生研究奨励賞 受賞者の声	4
アーカイブ化 ご協力をお願い	5
一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会 第72回大会について	6
事務局より	8

体育社会学専門領域研究会

「体育社会学は何を問うてきたのか—その特徴、独自性について」傍聴記

秋吉 遼子（東海大学）

2021年12月12日（日）に、体育社会学専門領域研究会がオンラインで開催された。テーマは「体育社会学は何を問うてきたのか—その特徴、独自性について」であり、隣接するスポーツ社会学や教育社会学との差異を意識的に捉えながら、体育社会学の学問の独自性について議論し、今後の体育社会学専門領域の目指すべきあり方を検討することが開催趣旨であった。登壇者は松田恵示氏（東京学芸大学）、水上博司氏（日本大学）、北村尚浩氏（鹿屋体育大学）の3名で、コメンテーターは大勝志津穂氏（愛知東邦大学）と稲葉佳奈子氏（成蹊大学）、司会は石坂友司氏（奈良女子大学）と原祐一氏（岡山大学）であった。当日のオンライン参加者は約50名であり、後日公開された本研究会の動画視聴回数は、公開から約1ヶ月（2022年1月20日時点）で、73回であった。

まず北村氏からは「研究動向からみた体育社会学の独自性：学会大会における一般発表演題から」というタイトルで、ビデオ報告による発表がなされた。内容は、日本体育学会における体育社会学研究について、専門領域のシンポジウムテーマ、ならびに一般発表演題等の視点から解析し、体育社会学の今後のあり方を検討するものであった。シンポジウムのテーマについては、第40回大会（1989年）、第50回大会（1999年）、第51回大会（2000年）に体育社会学研究のあり方についてふれられており、第51回大会（2000年）ではスポーツ社会学との対比についてもふれられていたことが報告された。加えて、1970年代後半に「体育」から「スポーツ」にシフトし、2006年以降は「スポーツ」ときどき「体育」となる印象がある旨も報告がなされた。また、一般発表演題の抽出語は「スポーツ」が圧倒的に多く、「体育」の約3.5倍であった。まとめとして、研究領域としての「体育」と「スポーツ」の二項対立への疑問、ならびに日本のスポーツの出自は体育であることを念頭に置いて考える必要性が述べられた。

続いて、水上氏は「経験知からみた体育社会学の独自性：NPO 実践という経験知から専門知へ」というタイトルで、NPO 実践という経験値と専門知へのプロセスの観点から、体育社会学の独自性について発表がなされた。広島コミュニティスポーツ研究会とみんなのスポーツ全国研究会の経験、約20年のNPO 法人クラブネットの活動ならびにNPO 実践と大学の職的使命との葛藤、実践から得られた経験値、言説と論文投稿をふまえた専門知へのプロセスが報告され、体育・スポーツ学の固有の認識枠組みに気づき、その拘束を解放することと、公と私の領域の中間で一市民としての研究者像を探求できることの2点が、体育社会学の独自性としてまとめられた。

最後に、松田氏は「関連領域との差異と『社会的出自』から見た体育社会学の独自性」というタイトルで発表がなされた。2016年の日本体育学会第67回大会における体育社会学専門領域プレセッション「体育社会学の今後の在り方について考える」を基盤に、学校体育と社会体育、ならびに体育とスポーツの軸があること、わが国

ではスポーツが体育として広がったという特性があること、隣接する教育社会学との関係の薄さ、対象の独自性と実践性（工学モデルと啓発モデル等）と方法論（制度としての体育、経験としての体育、テキストとしての体育）等の報告がなされた。また、教育科学としての実技指導者の養成学と社会的出自、体育社会学において問われなかったことと体育社会学の可能性、アプローチ（制度としての体育、経験としての体育）からの関連領域の布置等について見識を述べられた。

コメンテーターの大勝氏と稲葉氏のコメントと各登壇者の回答後には、参加者からの質問が受け付けられた。オンラインという環境から、活発なディスカッションをすることは困難であったものの、教育社会学と同様に体育社会学は教育（体育）と社会学に貢献するという共存のスタンスで良いのではないかと、研究が実践を変えることはできるのか、研究が実践を変えるのは機能的変容ではなく、構造的な面に寄与しなければならないのではないかと等の意見が出された。登壇者の発表とディスカッションを踏まえると、キーワードが複数あげられるが、最も重要となるのは「往還」ではないだろうか。体育とスポーツの往還、実践知と専門知の往還等である。実践知と専門知の往還という点では、学会の専門領域は、共通の *discipline* を有した専門知を蓄積するコミュニティであることから、まずは実践と研究の往還について、実践の理論を構築していくことが可能か否か検討していく必要があるのではないだろうか。

筆者には、十分な質を担保しながら研究会の傍聴記を2頁にまとめる能力が欠けている。その点をご容赦いただきたいが、体育学会の名称変更等に伴い生じた課題を解決すべく、ワーキンググループが立ち上がり、独立学会化が検討されている中での本テーマにおける研究会開催というプロセスだと思うが、社会や制度的な変化、ならびに学問の細分化が進んでいることから、体育社会学の独自性を考究する必要は必然的であったのではないかと感じている。

体育社会学の独自性について、対象で考えた場合、スポーツの出自が他国と違うわが国ではあるが、スポーツと体育の二項対立にこだわる必要はないというスタンスには賛同する。しかし、共通点と差異を明確化しないと、スポーツ社会学との差別化をはかることはできない。体育社会学の学問としての独自性は、スポーツ社会学では分析できるが、体育社会学では分析できない点、ならびに学問の実践への貢献といった際に、誰の何の実践に貢献することができるのかという点で検討することで、独自性がより明確になるのではないかと感じた。また、教育と社会が相互に影響しあうという点でも、体育社会学の独自性がある。この点は、研究と実践の往還という点にも関連するが、水上氏が述べていたように、体育社会学は、社会と接点がある学問であるが故に、他の領域と比較して優位性があり、実践と研究の一体化が可能な学問ではないだろうか。さらなる独自性の追及は、継続して議論することが必要だが、次は対面で活発な議論を重ねることが可能な環境であることを望む。

最後に、研究者としての私という個で捉えた際、最も印象的だったのは、水上氏の「学術論文執筆という行為（専門知）へ向き合っこそ、実践（経験値）の意味がわかる」であった。大学という職的基盤のある中、実践というフィールドに向き合う際の立ち位置と使命を今一度見つめなおす必要があると強く感じた。今日、多様な点で往還できないケースがあるが、会員の皆様のご健勝を祈りながら、筆を置きたい。

令和4年3月31日に「年報 体育社会学 第3号(2022)」が発刊されました。

- 巻頭言 松尾 哲矢
「年報体育社会学」の誕生の経緯と今後について
- 特別寄稿 山口 泰雄・吉田 智彦・玉澤 正徳・山口 志郎
TAFISA 加盟国におけるスポーツ政策の IP 分析
- 原著論文 二宮 清純・釜崎 太
ギラヴァンツ北九州の社会貢献活動に見る共的セクターの役割と課題
- 書評 栗山 靖弘
就職と体育会系神話 大学・スポーツ・企業の社会学／
東原 文郎
高峰 修
日本の体罰 学校とスポーツの人類学／
アーロン・L・ミラー
吉田 毅
部活動の社会学 学校の文化・教師の働き方／
内田 良 編
- 2021 年度専門領域活動報告
- 編集後記 石澤 伸弘

「年報体育社会学」編集委員会では、現在第4号（2023年3月末刊行）の投稿論文の原稿を受け付けております。投稿された論文が2023（令和5）年1月末までに論文審査を終えて採択されれば第4号への掲載となりますが、1月末を過ぎても採択後には翌年の機関誌の刊行（第5号）を待たずに J-stage へ早期公開し、可能な限り投稿者の研究成果を国内外の研究者に広く共有してもらえよう編集体制を整えております。投稿先を検討中という会員の皆様には、是非とも「年報体育社会学」へのご投稿を検討ください。なお、投稿には締め切りはございません。年間を通じて投稿を受け付けておりますので、何卒よろしくお願いいたします。詳細は、「投稿に関する諸規程等一覧」をご覧ください。

http://pesociology.jp/wp/wp-content/uploads/annualreport_regulations_20181008.pdf

「年報体育社会学」J-STAGE はこちらからご覧いただけます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/arspes/-char/ja>

「学生研究奨励賞」受賞によせて

堀田 文郎(立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 博士課程前期課程2年※)

(※第71回大会当時：現在同研究科 博士課程後期課程1年)

発表演題：

「ボディビル競技における『のめり込み』を惹き起こす要因とその過程に関する実証的研究」

この度、日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会の体育社会学専門領域において、「学生研究奨励賞」を受賞しましたこと、大変光栄に存じます。審査をして頂きました審査委員会の先生方、日頃よりご指導を頂いております松尾哲矢先生、勉強会の場等で様々なご指導、ご示唆を頂いております先生方に、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

本研究は、筋骨隆々で一見すると過剰に思える程、筋肉を鍛えることに専心するボディビル競技者に焦点を当て、競技者たちがなぜ肉体を作り上げることに心血を注ぐこととなったのか、その動的な過程と要因について研究したものです。具体的には、ボディビル競技者が競技へと過剰なまでに専心していく、すなわち、のめり込んでいく要因とその過程について、「肉体と競技者」「競技者と競技空間」「競技空間と生活空間」という三つの位相に着目し、考察を行いました。

分析の結果、ボディビル競技者は「努力を裏切らない」という特性を持つ肉体を基に、私生活を競技へと収斂させることによって筋肉を発達させようと試みる一方で、私生活を競技へと収斂させることにより、競技者にとってのボディビル競技はアイデンティティの支えや社会的承認の獲得手段、生き甲斐という意味において「拠りどころ」と化していることが示唆されました。ここにおいて、ボディビル競技を「拠りどころ」とする競技者は、肉体に対する「投資」を拡大させ続けることによって「成長」を維持しなくては、私生活やアイデンティティを十全に意味づけることができないような状況に置かれることとなり、これにより競技者の「成長」に対する追求が強迫的に強化されていることが明らかになりました。また、肉体に対する「投資」の拡大は私生活の競技への収斂を先鋭化させることへと帰結しており、のめり込みが自己増強的に強化されていく様相が看取されました。

以上を踏まえ、本研究の一つの到達点を示すならば次のように論じられます。すなわち、ボディビル競技における競技者の「のめり込み」という現象に着目したとき、そこでは、絶え間ない肉体への内省と修正という「肉体と競技者」の位相において生成された論理が、競技者を取り囲む社会関係や生活空間の論理を書き換えることによって、また、そのようにして書き換えられた社会関係や生活空間の論理がルーティン化された拘束力として競技者を競技へと固定化させることによって、ボディビル競技における「のめり込み」という現象が生み出されていると推察されました。

以上のように本研究では、ボディビル競技がいかんして競技者を拘束していくのかという競技の拘束性に着目

し、競技者の競技に対する「のめり込み」について分析を行いました。そのため、本研究ではボディビル競技の魅力については必ずしも十分に論じることができておりません。この点を今後の課題とし、今回の受賞を励みとしてより一層研究活動に邁進してまいります。引き続き皆様からのご指導、よろしくお願い申し上げます。



(堀田さんと松尾先生 立教大学池袋キャンパスにて、堀田さん写真提供)

アーカイブ化 ご協力をお願い

—広報委員会—

現在、日本体育・スポーツ・健康学会体育社会学専門領域の発表論文集・抄録集をアーカイブ化しています。第15号～現在までの論文集・抄録集については体育社会学専門領域ホームページ上で公開いたしました。第14号までのアーカイブ化については事務局で保管している現物がないことから作業を中断しております。もし、アーカイブ化にご協力いただける方がおられましたら、下記アドレスにご連絡いただけないでしょうか。

事務局メールアドレス：taishajimukyoku@gmail.com (事務局専用)

なおPDFにするにあたり、背表紙を約1cm程度切り落とす必要がありますので、その点をご了承いただける方がおられれば幸いです。何卒ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会について

標記学会大会が下記の内容で開催されます。詳しくは以下のHPをご覧ください。

<https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss72/top>

- テーマ：総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学 ー成熟社会に向けての不断前進ー

- 会期：2022年8月31日（水）～9月2日（金）

- 会場：順天堂大学さくらキャンパス

- 開催形式：対面式（一部オンライン配信）
 ※コロナの感染状況により、開催形式をオンラインに変更する場合があります。

- 大会スケジュール：大会1日目（8月31日）オープニングセレモニー／総会／
 テーマ別研究発表並びにテーマ別シンポジウム／
 本部企画シンポジウム
 大会2日目（9月1日） テーマ別研究発表並びにテーマ別シンポジウム
 大会3日目（9月2日） 専門領域別研究発表並びにキーノートレクチャー

	午前	昼	午後	夕方	
1 日 目	オープニング 総会	テーマ別研究発表 スポーツ文化(A) 学校保健体育(A) 競技スポーツ(A) 生涯スポーツ(A) 健康福祉(A)	ランチョン セミナー 名誉会員 懇談会 (昼休憩)	テーマ別シンポジウム スポーツ文化(A) 学校保健体育(A) 競技スポーツ(A) 生涯スポーツ(A) 健康福祉(A)	本部企画シンポジウム(1) 本部企画シンポジウム(2) 情報 交換会
2 日 目	テーマ別研究発表 スポーツ文化(B) 学校保健体育(B) 競技スポーツ(B) 生涯スポーツ(B) 健康福祉(B)	テーマ別シンポジウム スポーツ文化(B) 学校保健体育(B) 競技スポーツ(B) 生涯スポーツ(B) 健康福祉(B)	ランチョン セミナー 地域協力学会 連絡会議 (昼休憩)	テーマ別研究発表 スポーツ文化(C) 学校保健体育(C) 競技スポーツ(C) 生涯スポーツ(C) 健康福祉(C)	テーマ別シンポジウム スポーツ文化(C) 学校保健体育(C) 競技スポーツ(C) 生涯スポーツ(C) 健康福祉(C)
3 日 目	専門領域別企画 研究発表／キーノートレクチャー		ランチョン セミナー 専門領域 連絡会議 (昼休憩)	専門領域別企画 研究発表／キーノートレクチャー	

- 学会本部企画
 シンポジウム
 - (1) 「総合知を支える学会」を目指して
 - (2) 持続可能な成熟社会と体育・スポーツ科学

■ 応用(領域横断)研究部会企画

スポーツ文化研究部会シンポジウム

- (A) スポーツを通じた開発支援と持続可能性
- (B) スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か
—身体・組織・支援の観点から—
- (C) スポーツ文化の浸透戦略(2)
—身体文化の伝承・継承を科学する—

学校保健体育研究部会シンポジウム

- (A) 共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性
—多様性理解の観点から—
- (B) より良質な保健体育授業とその学習内容を考える
—「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにして—
- (C) 子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

競技スポーツ研究部会シンポジウム

- (A) トップアスリート養成の拠点としての大学の 意義と問題点Ⅱ
—トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目して—
- (B) 競技スポーツの女性コーチ養成
- (C) ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

生涯スポーツ研究部会シンポジウム

- (A) 協働システムの現状と課題から今後を考える
—“支えるスポーツ”が果たす役割—
- (B) 子どもたちの Well-being とスポーツ
—政策・産業・そして遊び—
- (C) 国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点(その2)
—国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて—

健康福祉研究部会シンポジウム

- (A) ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方
—「女」を生きることと健康・スポーツ—
- (B) 運動から認知へ、認知から運動へ
- (C) オンライン化で得られる健康、失う健康

■ 専門領域別企画

本専門領域で企画する内容および研究発表につきましては後日、お知らせ致します。

事務局より

1. 会員動向：体育社会学専門領域の会員数は、2022年5月17日現在348名です。
2. 会員情報変更：日本体育・スポーツ・健康学会会員の名簿管理は学会本部が行っております。勤務先の移住所・所属などの変更があった場合は、すみやかに「会員情報変更届」（『体育学研究』に添付）を学会本部事務局にFAXまたは封書で送付してください。学会本部とともに専門領域事務局にもメールでご連絡いただくと助かります。
3. 会則および諸規定等の改訂版について：諸規定等の改訂版は、随時専門領域ホームページに掲載していますので、ご確認ください。

事務局メールアドレス：taishajimukyoku@gmail.com（事務局専用）

あとがき

News Letter 2022 Spring Issue をお届けいたします。昨年度の日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会の開催直前の8月末以来のお届けとなります。大変期間が空いてしまい申し訳ございませんでした。特に早くから掲載原稿をいただいていた会員のみなさまには深くお詫び申し上げます。ご存じのとおり、同学会大会よりプログラム全体の構成が大幅に変更されました関係で、本専門領域におけるキーノートレクチャー、シンポジウムが開催されず、例年学会大会後に発行されるNews Letterでのそれらの企画の傍聴記の掲載ができなくなりました。また、学会大会で開催される専門領域総会の資料の掲載というNews Letterの従来の使命も、今回で第3号となります「年報 体育社会学」に移行しております。News Letterにとってのこうしたルーティン業務の減少という理由もあって、掲載すべき情報が集まるのを待ってここまでその発行が遅れてしまったわけですが、その間に今後News Letterで取り上げていくべき内容について改めて考えることにもなりました。広報委員会として、News Letterはもちろんのこと、本専門領域のHPも含めて、会員のみなさまに有益な情報を提供できるように努力したいと思っております。会員のみなさまからもご意見やご要望をお寄せいただけますと幸いです。よろしく願いいたします。

コロナ禍も既に2年以上が経過しましたが、まだまだ様々な制限下でのスポーツ活動が余儀なくされております。世界に目を向けますと、戦火でスポーツどころではない大変な状況に置かれているたくさんの方々がいまいます。一刻も早く平穏な世界が戻り、みながスポーツを心から楽しめるようになることを願ってやみません。各会員のみなさまにおかれましては、くれぐれもお身体ご自愛ください。

藤井雅人（広報委員会）